

ディドロ・ダランベール『百科全書』パリ版

三浦 太郎*

『百科全書』は、1751年から1772年にかけてフランスの啓蒙思想家ディドロとダランベールが中心となって編集・完成した百科事典であり、近代における「知の編纂」を試みた文献として、学術史、印刷史、書誌学史上きわめて重要な地位を占めている。「技術と学問のあらゆる領域にわたって参照されうるような、そしてただ自分自身のためにのみ自学する人びとを啓蒙すると同時に、他人の教育のために働く勇気を感じている人びとを手引きするのにも役立つような」事典であり（「序論」、本文17巻および図版11巻の全28巻からなる。シュワブラの研究（Inventory of Diderot's Encyclopedie, In Studies on Voltaire and the Eighteenth Century, 1971-72, 6 vol.）によれば、総項目数は71,709を数える。

『百科全書』は、産業革命を背景として学術・工芸の分野が社会生活へと波及していく近代18世紀において、新たな知識領域を横断的に記述しようとする試みであると言え、同時に当代の研究者たちの共同によって「近代的な編集知」を初めて体現したのもでもあった。近代科学技術の知識体系が集約され、前近代的な旧来の世界観を打破し、合理的思考を招来した文献として高く評価されるものである。こうした学術史上の基礎資料を多く

*みうら・たろう／明治大学文学部准教授

の国内研究者の調査に供することは、学術研究図書館にとって重要な使命である。

世界を一冊の書物に収めてしまおうとする試みには、たとえば古代ローマのプリニウスが著した『博物誌』全37巻がある。『博物誌』はルネサンス期に印刷されて知識人の間に広まったが、宇宙、元素、天体、気象など、天文関係の事柄にはじまり、地理、人間、動植物、鉱物など、自然現象を網羅する内容であった。そこには怪獣や巨人のような非実在のものが記述されたり、記述の信憑性に疑念の抱かれる箇所も決して少なくはなかったが、世の中の事物すべてを書き尽くそうとする百科全書的な集大成の原点であった。また、1545年には、博物学者コンラート・ゲスナーによって浩瀚な『萬有文庫』が刊行された。これはラテン語、ギリシア語、ヘブライ語で書かれたすべての書物の収集を目指した網羅的書誌で、1万2000点上る書物について、内容の要約、抜粋、序文の内容を記しており、古代から同時代までの著述家、通説によれば3,000名について、アルファベット順索引で引けるような工夫もこらされていた（本学図書館も洋貴重書として所蔵（091.3/970/H）¹）。

しかるに18世紀に入ると、学問領域が拡大・細分化の傾向を帯びるようになり、産業の成果が社会の各所に波及するようになった。個人の博学的才よって知識の全領域を網羅することはもはやできず、知識体系を横断的に展望する新たな枠組みが必要とされた。集団による「知の産出」が求められるようになり、ここに誕生したのが『百科全書』であった。

『百科全書』の刊行の発端は、パリの出版業者ル・ブルトンが英国で評判のチェンバースの『百科事典』全2巻（1728）の仏訳を試みたことにある。当初ささやかな出発であったこの事業は挫折と修正を重ね、若き思想家デイドロが一介の翻訳者から編集責任者（ダランベールと共同）として関わるようになる中で、単なる翻訳ではなくチェンバースを超えたフランス独自の大百科事典構想の実現に向かうこととなった。1751年に「本文」第1巻

¹「第39回明治大学中央図書館企画展示 新取貴重書展」[http://www.lib.meiji.ac.jp/about/exhibition/gallery/39/39_pdf/pamph.pdf]（最終アクセス日：2013年1月20日）なお、掲載される著述家の数は5,200名以上とも指摘されている（雪嶋宏一「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌的源泉」『早稲田大学教育学部』学術研究—教育学・生涯教育学・初等教育学編』no.59, 2011, p.47-71.）。

が出てから、教会勢力からの発行禁止令などの激しい攻勢にも見舞われた結果、全巻の刊行が終了したのは22年の歳月の過ぎた1772年のことであった。「本文」17巻と図版11巻の計28巻がディドロの編集になる部分であり、のちに出版者のパンクックが、ディドロの協力を得られないままに補遺と索引7冊を刊行している。

執筆者は「百科全書派」と呼ばれ、その中にはヴォルテール、モンテスキュー、ルソーら、当代屈指の思想家も含まれていた。ディドロが執筆協力を依頼したのは愛好家、学者、技芸家の人びとであり、主要な寄稿者については圧倒的に第三身分が多かった。社会の非生産的階層に属する特権階級や聖職者、秩序側に与する知識人や法律家は遠ざけられた。「百科全書派」とは、新しい経済的社会的秩序が育まれつつある中で、硬化した過去の桎梏から解放され、それぞれの活動領域で探求や革新を推進しようとしている人びとであった²。『百科全書』の意義は、そうした知識人の共同編集作業を実現した点にあり、当時の先進的な技術や科学的知識を網羅したこの書物は、旧来の世界観を打破し、合理的で自由な考え方を人びとにもたらしたと評価されている。

教会勢力から『百科全書』の刊行に攻勢がかけられたのも、それが当時の権威に抗う試みだったためであった。当時、「真理」とは教会とソルボンヌ神学部によって独占的に管理される事柄であった。この2つの権威から外れた場所でいかなる思想が表明されたとしても、「真理」にそぐわない考え方は排除されるよりほかはなかった。そうした時代に、民間の出版事業を通じて巨大な「知の体系」が世に出されたのは画期的な事件であったと言える。『百科全書』の中には、たしかに、宗教上のさまざまな教義をキリスト教の教えそのままになぞらえている記述もあれば、執筆協力者の中に教会関係者もいないではなかった。しかし、出版主体があくまで民間出版者であり、その理念を支えた主導者がディドロ、ダランベールのように大学に籍を置かない知識人であったという点に端的に示されるように、この書物には「在野性」という大きな特質があった。また、『百科全書』では各項目に「参照」を付し、項目間の関連性を秩序立てようとしているが、た

² 鷲見洋一『「百科全書」と世界図絵』岩波書店, 2009, p.31-48.

たとえば復活祭の「四旬節」に付された参照項目の「断食」には、四旬節の絶食の習慣がいかにかに身体に悪影響を及ぼすかが医学の立場から記されていた。これは、検閲官の意識する項目を意図的に避けて、キリスト教批判を展開した一例ととらえられる³。

『百科全書』では「補遺」として「人間知識の系統図」を示したが、ここではフランシス・ベーコンが『学問の進歩』で示した知識分類を展開し、ルネサンス以来の人間中心の分類体系を提示している。まず、知識の根源に人間の「知性」を置き、知性が有する3つの機能、すなわち「記憶」「理性」「想像」からすべての知識が派生するとする認識が示されるが、このうち記憶に相当する「歴史」の分野を見ると、もっとも大きな記述配分がなされたのは「自然史」であった。並び順としては、歴史の筆頭に教会史、それから世俗史が置かれるが、圧倒的に細かく区分されたのは自然史である。人間が技術を用いて自然を加工し何かを作り出す活動領域はすべて、この自然史に網羅された。また、理性に相当する「哲学」の分野でも、並びは形而上学、続いて「神についての学問」と配置されるが、記述の中心は、そのあとに続く「人間についての学問」と「自然についての学問」の項目であった。神についての学問にはあえて「迷信」や「妖術」といった項目が並べられ、旧来の価値観の打破という意図が明確であった。

上記のように『百科全書』は近代知を語る上で欠かすことのできない史料と言えるが、その日本における所蔵状況を見ると、すでに筑波大学、高知大学、一橋大学、名古屋大学、慶應義塾大学などの大学図書館や大阪府立中央図書館大原文庫において所蔵されている。しかし初版の「パリ版」を所蔵しているのは少数に限られており、多くは1770年以降に出版された「ジュネーヴ版」の所蔵であった。両版は似通った部分もあるが、発刊当時の知の体系を十分に理解する上では「パリ版」がふさわしく、本学図書館において利用提供体制が整備されたのは、研究・教育上、きわめて有益であると言える。

³ 鷲見洋一『『百科全書』と世界図絵』岩波書店、2009、p.49-54。また、対立しあう見地から書かれた項目を複数示すクロスレファレンスの特性により、読者は能動的に自ら批判的対応をとるように迫られるとの指摘もある（寺田元一『編集知の世紀：一八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』』日本評論社、2003、p.178-198）。